

ヨーク大学南部アフリカ研究センター

はやし
林
こう
晃
じ
史

ヨーク市はロンドンから北ヘインター・シティ（主要都市間を結ぶ急行列車）で約2時間のところにある古い町である。その中心にはヨーク・ミンスターと呼ばれる聖ペテロ寺院が中世の面影をそのままに残してそびえ立ち、市の周囲は城壁で囲まれ、さながら日本の京都、奈良をおもわせる古都である。この町の南東約2分の郊外にヨーク大学がある。新設のこの大学は大きな池のある広大なキャンパスをもっているが、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の雰囲気はなく、モダンな感じのカレッジが点在している。このヨーク大学が昨年（1984年）秋、第22回イギリス・アフリカ学会大会が開催され、それに出席した際に、同大学付属の南部アフリカ研究センター所長L・ホワイト博士にインタビューし、同センターの活動状況について情報を得た。

かつてイギリスの植民地が多くあった南部アフリカとイギリスの関係は、それら植民地が独立したあとにも緊密で、このことは研究面についても同様であるが、筆者が知る限り、イギリスの南部アフリカ全体のまとまった研究機関としてはロンドン大学英連邦研究所（1949年設立）とこのヨーク大学南部アフリカ研究センター（1972年設立）が中心であるように思われる。さらに前者が19世紀末・20世紀初頭のいわゆる帝国主義期の研究に重点を置いているのに対し、後者はより現代的な問題に取り組もうとしている姿勢が窺われるし、旧ポルトガル領アンゴラ、モザンビークも同時にカバーしているのが大きな特徴である。

以下、同センターの組織、研究活動、研究者養成活動、蔵書、出版広報活動の順に紹介していこう。

組織は、昨年退官したC・ヒル所長（政治学）の後を受けて前述したL・ホワイト（文学・言語）が所長に就任し、現在の研究スタッフはA・V・アケロイド（社会学）、C・ストーンマン（開発経済学）、H・S・ウィルソン（歴史）の4人と少人数であるが、でき得る限り

各専門分野をカバーしようとしている（研究スタッフの主要業績については文末参照）。各スタッフは大学での講義、大学院生指導の他に、学期中の毎木曜日午後4時30分～6時30分に行われる研究セミナーに出席し、研究の交流をはかっている。同セミナーにはイギリス国内の研究者や国外の学者および後述する大学院生も出席し、研究者の養成も兼ねている。ちなみに最新学期（1985年春学期）の報告題名、報告者を示すと以下のように多方面にわたっていることが分かる。

- | | | |
|-------|---------------------------|----------|
| 1月24日 | チレンブウェ蜂起とその後 | L・ホワイト |
| 1月31日 | ザンビアの農業生産 | J・ポチエ |
| 2月7日 | バンツースタンの階級と政治 | C・マレー |
| 2月14日 | フランス語圏文献にあらわれた「ズールー族」のシャカ | Z・マラバ |
| 2月21日 | ニヤサランドの賃金と労働条件 | R・パーマー |
| 2月28日 | アフリカの保健・疾病の政治経済学 | B・ウィスナー |
| 3月7日 | 南部アフリカ政治におけるパン・アフリカニズム | A・リベダ |
| 3月14日 | 1964年マラウイの政治危機 | A・ロス |
| 3月21日 | 1825～75年西ケープの労使関係 | R・エレンツェン |

つぎに同センターの活動のもう一つの柱である研究者養成活動についてふれておこう。

日本の大学では、現在でもアフリカ（就中南部アフリカ）を対象とした大学院コースはないが、若手研究者の育成は研究活動の深化・活発化のために不可欠である。このため、同センターには大学院生および国内各地専門学校（ポリテクニク）教師を対象とした1年間の大学院コースが設置された。授業内容は、第1・第2学期は主に20世紀初頭までの南部アフリカの歴史の流れを理解してもらうために、同地域の植民地化、それに対するアフリカ人の対応、民族主義、エスニシティ、都市化およ

び工業化によるアフリカ人社会への影響、階級形成、開発・低開発理論、南アフリカ共和国のアパルトヘイトの根源とその展開、南部アフリカにおける南アフリカ共和国の支配などを中心に、週2回授業が開かれる。そして第3学期にはそれまでの授業とは逆に、学生側の研究発表を中心に行なわれる。さらに、各学期末には学生は論文の提出が義務づけられている。以上の課程を修了すれば、修士号(M. Phil)、博士号(D. Phil)取得の資格が得られることになる。また以上の授業の他に、大学院生は前述した研究セミナーに自由に出席でき、ここで研究手法、新しい研究動向、問題点を体得することになる。

さて、これまで述べてきた研究活動および研究者養成のためには、当然のことながら、彼らが利用できる資料がなければならぬ。そこでつぎにライブラリーについてみていくことにしよう。

「オックスブリッジ」のように伝統のない大学では資料を各分野にわたって万遍なく集めることは予算的に困難であり、いきおい特定テーマに特化して集めざるを得ない。同センターは1974年10月以降、レバーフルメ基金(Leverhulme Trust、多国籍企業レバー・ブラザーズ社による基金)などの援助を得て、「南部アフリカ資料収集計画」を発足させ、精力的に資料収集に乗り出した。その結果、現在までに200件以上の貴重な個人のコレクションを含む約2万5000点の文献を収集した。そのなかには、前ポルトガル首相A・O・サラザール文書、前南アフリカ総督パトリック・ダンカン文書、アンゴラの政党に関するデビッド・グレンフェル文書、南アフリカ・アングリカン教会に関するヨースト・デ・ブランク文書、モザンビークのヴィリヤム虐殺事件に関するアドリアン・ヘイスティングス文書など重要な資料が含まれ、さらに今では現物入手できない文献はマイクロ化して保管している。この「収集計画」は1977年に一応完了し、その成果はLodge, T.(comp.), A. V. Akeroyd; C. Lunt編, *A Guide to the Southern African Archives in the University of York* (1979年, 153ページ)として刊行された。

さらに同センターはイギリスの「アフリカに関する図書館資料常設会議」(Standing Conference on Library Materials on Africa, 通称SCOLMA)に参加しており、SCOLMAが現在進めている「地域特化計画」(SCOLMA's Area Specialization Scheme)の一環としてナミビア(旧南西アフリカ)の資料を集中して集めることが

課せられた。その結果、現在までに以下の貴重な資料を収集している。すなわち *The Windhoek Advertiser* (1919~45), *Southwest Africa Administration* (1918~46), *Southwest Africa Legislative Assembly* (1967~75), *Official Gazette of Southwest Africa* (1974~78) 等である。ちなみに、同地域特化計画によるイギリス国内の分担は、サザンプトン大学(ジンバブウェ)、ロンドン大学アジア・アフリカ学院(ボツワナ、レソト、スワジランド)、マンチェスター大学(アンゴラ、モザンビーク)、エジンバラ大学(マラウイ、ザンビア)となっており、南アフリカ共和国に関しては資料が多いため専門分野別に二つに分け、高等法律・教育研究所(法律、教育)、ロンドン大学政治経済学部図書館(政治、経済、社会)が各々担当している。

最後に広報・出版活動にふれて結びとしたい。現サッチャー政権下で教育関係予算が軒なみに縮小されている現在、研究所のレーズン・デートルを世間に示すためにもどの研究機関も広報活動には力を入れている。同センターの場合、1974年以降「進行中の南部アフリカ調査」(Southern Africa Research in Progress)というテーマの下に毎年公開の会議を開催しているほか、他の研究機関と共同して1973年以降隔年ごとに国際会議を開いている。ちなみにこれまでのテーマは「南アフリカ経済とアパルトヘイトの将来」(1973年)、「南部アフリカ情勢下の文学」(1975年)、「南部アフリカの政治」(1977年)、「南アフリカにおける外資企業に対するEECコード」(1979年)、「南部アフリカの文学と社会」(1981年)であり、1970年代の激動した南部アフリカの情勢に対応した姿勢を示している。

出版活動については、前述した研究セミナーの報告をもとに、1975年以降5冊のコレクテッド・ペーパーズを発行してきた。各巻150ページ内外で8~10の報告を収録した各巻の内容についてはスペースがないので紹介をはぶくが、ロンドン大学英連邦研究所の『19・20世紀南部アフリカ社会・コレクテッド・セミナー・ペーパーズ』とともに南部アフリカ研究に関して高い学問的水準を示している。しかし残念なことに予算の関係で1980年以降刊行が止まっている。

以上紹介してきたように、同センターは少数の研究スタッフにもかかわらず、研究活動に加え、研究者養成も同時に行ない、かつ通常の活動の他に年1~2回の公開会議を開催するというきわめて活動的な研究機関である。さらに近年南部アフリカ諸国が南アフリカ共和国の

研究機関紹介

経済的支配から脱却するために1979年結成した「南部アフリカ開発調整会議」(SADCC) 共同研究計画を発足させ、南部アフリカ諸国の経済開発、地域協力問題を取りあげるなど現状に呼応した柔軟な姿勢を示している。

研究スタッフの主要業績(著作のみ)は以下のとおり。

White, Landge; L. Vail, *Capitalism and Colonialism in Mozambique: A Study of Quelimane District*, ロンドン, Heineman, 1980年。

同, *Oral Poetry from Africa: An Anthology*, ロンドン, Longman, 1983年。

Akeroyd, A. V.; F. Ansprenger; R. Hermle; C. R.

Hill 編, *European Business and South Africa:*

An Appraisal of the EC Code of Conduct, マインツ, Matthias-Grunwald, 1981年。

Stoneman, Colin 編, *Zimbabwe's Inheritance*, ロンドン, Macmillan Press, 1981年。

Wilson, Henry S., *The Imperial Experience in Sub-Saharan Africa since 1870*, ミネアポリス, University of Minnesota Press, 1977年。

Hill, Christopher R., *Change in South Africa: New Direction or Blind Alleys?* ロンドン, Rex Collings, 1983年。

(アジア経済研究所海外調査員, 在ロンドン)